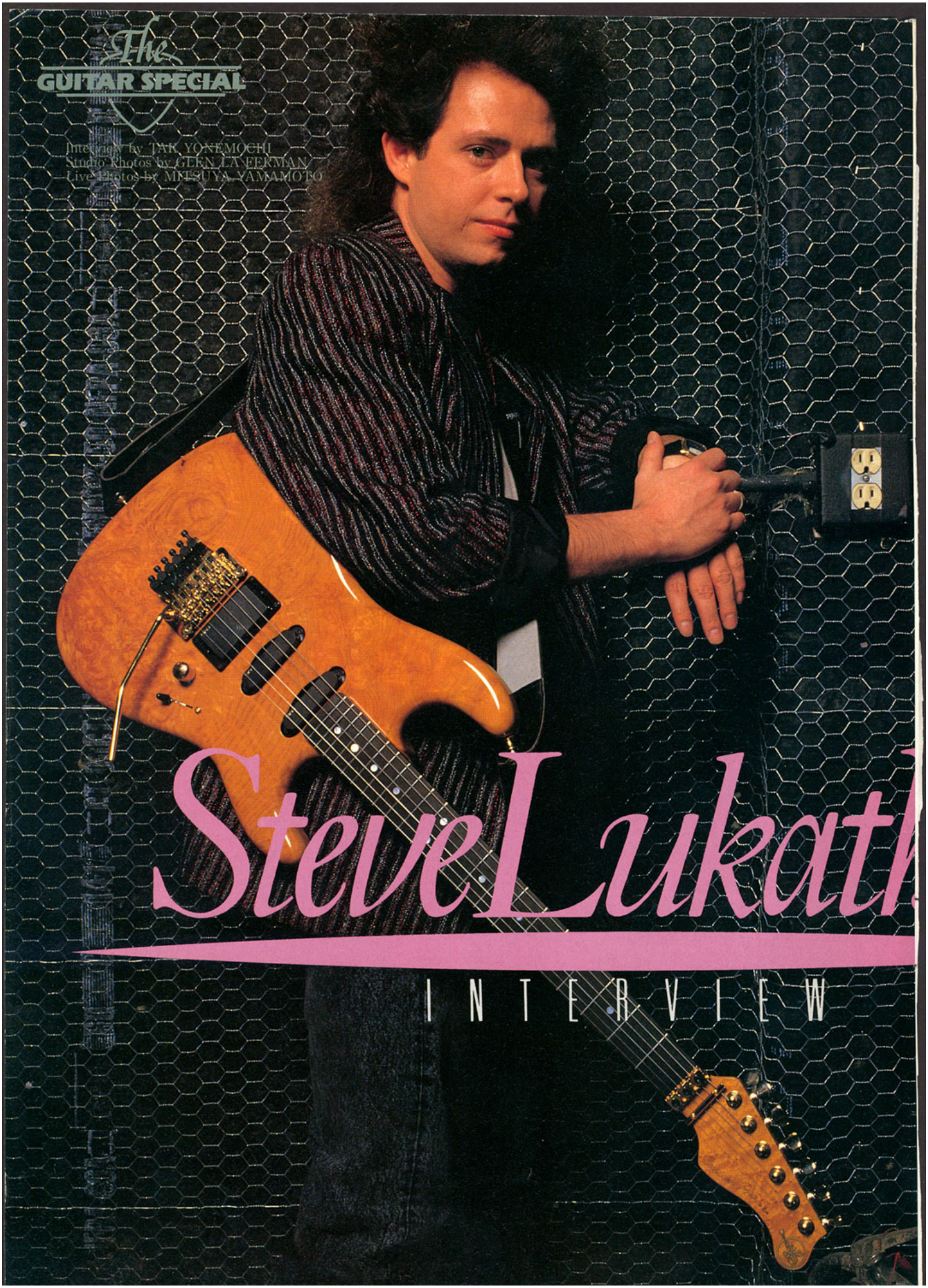
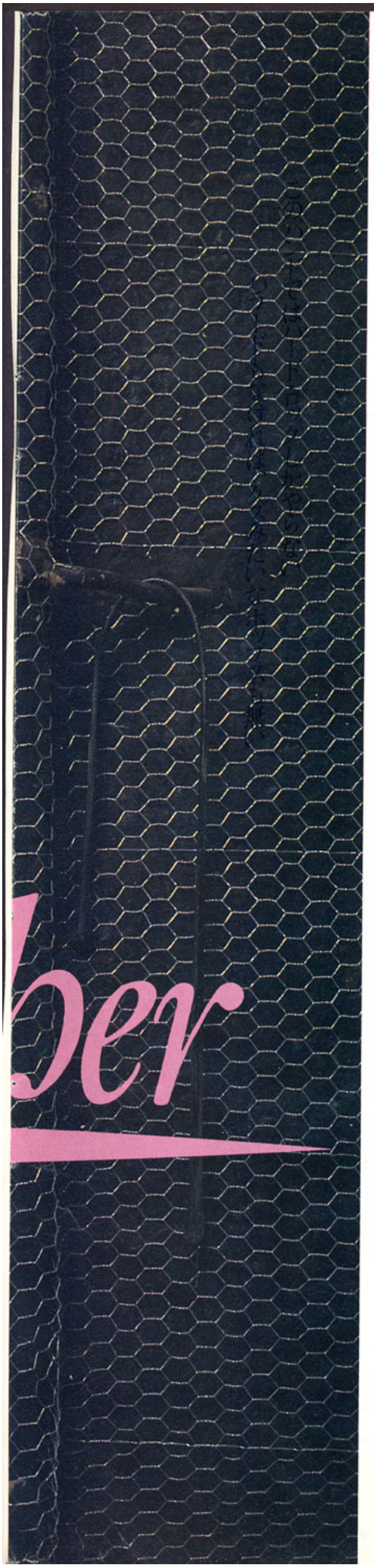
The GUITAR SPECIAL

Interview by TAK YONEMOCHI
Studio Photos by GLEN LA FERMAN
Live Photos by MITSUYA YAMAMOTO



Steve Lukath

INTERVIEW



今年の春先から噂されていたルークのソロ・アルバム『LUKATHER』がいよいよ発売された。TOTOの中心人物として、さらにはアメリカを代表するセッション・ギタリストとして数えきれないほど多くの名演奏を残す彼としては、この初のソロ・アルバムの制作は遅過ぎるほどだ。先日もジェフ・ベックやニール・ショーンらとのビッグ・イベント、「NEW GIGS'89」でスピーディでパワフルなそのサウンドを聴かせてくれたばかり。このインタビューは来日直前に電話で行ったものであり、ソロ・アルバム、グループ、イクイップメントなどについて語ってもらった。

スティーヴ？　元気かい？

おかげさまでね。今絶好調ってとこだよ。

色々と問題があったみたいで心配していたよ？

心配かけてゴメン。TakとLAで会った時にはまさかあんな風になるとは思わなかった……。でももうすべてクリアーになった。ツアーも決ったしね。ジェフ・ベックといっしょに日本へ行くよ。8月3日にLAを出て8回のギクをやるんだよ。フェスティバルみたいになっていて色々な人達が出るはずさ……バッド・イングリッシュとかタワー・オヴ・パワーとかの名前が上がっているみたいだけれど僕ははっきりとした事はわからない。

でもジェフとはセッションやるんでしょ、きっと……。

うん、それは確かさ。前回セッションをやった時とは一味ちがった事ができるんじゃないかと思っているんだけれどね。今回は、自分のバンドもいっしょだし。もう限りなくロックするよ。いよいよ日本でもアルバムがリリースされるしね。今緊急リリースの手配をしているところだと思う。

ジェフ・ベックも自分のグループで来るんだよね。

そう、テリー・ボジオがドラムス、そしてトニー・ハイマスがキーボード。ジェフのニュー・アルバムもう聞かせてもらっちゃったんだけど、僕が今まで耳にしたどんなギター・アルバムよりエモーショナルで感激したよ。先週いっしょにセッションしたんだ。

どこで？

ほら僕がいつもやっているセッション・バンド、ロス・ロボトミーズ……

うん、良く知ってる、なんでもありの楽しいヤツね

そこへ飛び入りしたんだよ。

それじゃクラブを観に来ていた人達はビックリしたんじゃない？

うん、大変だった……。

それじゃ今はそのジェフといっしょのジャパン・ツアーに向けてリハーサル中ってわけだ？

一週間後から開始する。今はちょっとTOTOの仕事をしているんだ。ボビー・キンボールが帰ってくる話はしたよね。

うん。

年末に出す〝グレイテスト・ヒッツ〟に新曲を入れようと思ってそれのレコーディングをやっているところなんだ。2曲入るんだけれど、いずれもボビーが歌っているよ。

その新曲ってだれが書いたの？

僕のが1曲、それからテイヴィットが1曲書いた……あとそのアルバムに入る曲のセレクションも終っているしね。オリジナル・ライン・アップがそろってTOTOもまたまたパワー全開って感じになったよ。とにかく自分のバンドがリハーサルを開始する前にこっちのレコーディングを仕上げてしまわないとね。

しばらくは自分のバンドで活動するんでしょう？

うん、TOTOを仕上げたらすぐにリハーサルに入り、ジャパン・ツアーそれからヨーロッパ・ツアーと続ける予定さ。このバンドではハード・ロックしかやらない。バラードもなければ、クズみたいなポップスもない。ただカバー・ソングは何曲かやると思うけれどね。9月にロス・ロボトミーズのアルバムが出るんだけれど、この中でやった曲を何曲か自分のステージでやってみたいとは思っているよ。

えっ!?　ロス・ロボトミーズもアルバムを作るの!?

うん、もうこれは終っているんだ。9月にリリースする……ライヴ・レコーディングだからね。ドラムスがヴィニー・カリューウタ、ジェフ・ポルカロ、カルロス・ヴェガ。ベースがウィル・リー、ギターが僕。キーボードがディヴィット・ガーフィールドとジョー・サンプルなんだ。すべてライヴで録られたものさ。なんとも形容しがたいサウンドだよ(笑)。ラインアップから想像はつくと思うけどね。

いつ録ったの？

もう2ヶ月ぐらい前かな……自分の長いキャリアのなかで、今まさにひとつのハイライトを迎えているって感じかな(笑)。忙しくて大変さ。色々なことやっているからね。

ところでルークのソロ・アルバムはアメリカでいつリリースされるの？

今それを決めているところなんだ。CBSアメ

リカとはもうやらないから。他社4社からオファーが来ているから、そのうちのひとつに決めるだろうね。

いったい何があったの？　日本のファンも心配していたんだけれど……。

いわゆる〝政治〟ってヤツさ。新しい社長が入ってきて、自分は音楽がまるでわからないから、古くからCBSにいるアーティストをみんなクビにして新しくスタートさせようとでも思ったんじゃない(笑)。きっとヤツは僕のアルバムなんか聞いてもいないよ。〝何!?　TOTOのギタリスト！　そんな過去の人間のソロ・アルバムなんか売れるわけがない!!〟なんて言ったんだ。大笑いだろ。

ずいぶんひどい話しじゃない！

そうだろ！　でももう安心して、すべて片ずいたからね。

それじゃここで少しアルバムの内容について説明してよ。それぞれの曲についてひとことずつコメントしてくれる？

OK。

「トゥイスト・ザ・ナイフ」からいってみようか？

これはエディ・ヴァン・ヘイレンとの共作でね。彼とはいわゆる遊び仲間でね、いつも顔を合わせると何かいっしょにやりたいねなんて言っていたんだけれど。こんな形で実現するとは思ってもみなかったよ。そもそもこの曲はエディがヴァン・ヘイレンでやるために書いたものだったんだけれど、バンド内では評判が良くなかったらしくてね。彼らがモンスターズ・オヴ・ロックのツアー中にツアー先から電話してきて、もしルークが気に入れば、この曲をいっしょにやろうっていい出したんだ。僕としては最初ヴァン・ヘイレンぽい曲だなとは思ったけれど、自分のパートを加える事によってまったく別の世界を作り上げることに成功したと思っているよ。それから僕のソロ・アルバムという事でエディにはベースを弾いてもらった（笑)。

サミー・ヘイガーもまったく同じ事を言っていたよ、ほらサミーのソロで彼がベースをやっているじゃない？

うん知ってる。エディのギターというのはあまりにも個性的すぎて他の人のレコードでは浮いてしまうんだよね。

さもなければマイケル・ジャクソンの「ビート・イット」みたいにその曲自体を自分のキャラクターで乗っ取ってしまう（笑)。

そうだね。

続いて「スウェア・ユア・ラヴ」

これはリチャード・マークスといっしょに作ったヤツだ。わりとポップにまとめ上げた曲だね。アルバム中最後に仕上げた曲がこれだった。

そして「フォール・イントゥ・ヴェルヴェット」。

スティーヴ・スティーヴンスとも長い付き合いなんだけれど、頂度彼はビリー・アイドルのバンドをやめたばかりで何もしていなかったんだ。それで2人で何かやろうという事になって。スティーヴのアイデアでニュー・ヨークに行く事にした。僕は今までニュー・ヨークで仕事をした事がなかったから、これはいいチャンスだと思って飛んでいったのさ。曲は僕とスティーヴの共作、詞を書いてくれたのはフィックスのサイ・カーニンだよ。曲中、僕とスティーヴとヤン・ハマーのかけ合いが出てくるけれど、あれはすべてライヴなんだ。それもテイク・ワンなんだよ。

すごいね……ヤンとはどうやって知り合ったの？

前回の日本ツアーさ。ジェフ・ベックといっしょにいたじゃない彼が……。

なるほどね。でも本当にすさまじいインター・プレイだね。まるで全盛期のマハビシュヌ・オーケストラみたいだ。ジョン・マクラフリン、ジェリー・グッドマン、そしてヤン・ハマー……。

そうでしょ！　そこをねらったんだもの(笑)。

続いて「ドライヴ・ア・クルケッド・ロード」は？

これはダニー・コーチマーとの共作だね。ダニーがリズム・ギターをやり、それ以外のギターはすべて僕が入れた。バック・ヴォーカルでハートブレイカーズのスタン・リンチが参加しているよ。

「ガット・マイ・ウェイ」。

これは僕の幼ななじみというか、もう兄弟ともいえるマイケル・ランドゥーとの共作だ。作詞面でキーボード・プレイヤーのランディー・グッドラムが助けてくれた。

「ダーケスト・ナイト・オブ・ザ・イヤー」

これもニューヨーク・セッションからなんだけれど、曲は僕とスティーヴの共作。わりとシンプルなセッションで作られたものだよ。

「ロンリー・ビート・オヴ・マイ・ハート」

これは僕とダイアン・ウォーレンの共作だ。ティヴッド・ペイチがハモンドをプレイしている。これからバッキング・ヴォーカルは僕とリチャード・マークス、そして元エア・プレイのトミー・ファンダーバークがやっている。

「ウィズ・ア・セカンド・チャンス」。

この曲も「ターン・トゥ・ストーン」は基本的に僕とランディー・グットラムの2人で作ったものなんだ。

「イット・ルックス・ライク・レイン」。

この曲ではマイケス・ランドゥーがギターを弾いているんだ。あと僕は12弦ギターをプレイした。曲は僕とトム・ケリー、そしてビリー・スタインバーグの共作さ。

それでは最後の「ステッピン・オン・トップ・オヴ・ユア・ワールド」。

これはまたしてもダニー・コーチマーとの共作。ドラムスはジェフ・ポルカロだよ。ここでダニーがリズム・ギターを少々、それか

らキーボードも少しプレイしている。バック・ヴォーカルはスタン・リンチとアイヴァン・ネヴィルがやっているよ。

しかしすごい人々がたくさん参加しているね。あらためてこうやって紹介されると本当に感心してしまうよ。

みんな遊び友達さ。いつも良く遊んでいるヤツばかりなんだ。みんなロぐせのようにこんどいっしょにやりたいねっていっていたからそれを具現化させただけだよ。ソロ・アルバムだからすべてを一人でやっても良かったんだけれど、それじゃ一人のエゴを外に出すだけで、みんなに楽しんでもらえるようなものは作れないと思ったからね。

そうかもね。でも僕が一番感心したのはあれだけたくさんの人達が参加しているのに、すべてがルークのカラー一色にそめられていたという事だね。あんなに個性の強い人達を良くあれだけコントロールしたよね。

そういってもらえると、とてもうれしいね。

ところで自分のレギュラー・バンドはどういったラインアップになるの？

ドラムスがジョン・キーン、ベースがジョン・ピアス、ジェフ、ダニエルズがキーボード、ウォーレン・ハムがヴォーカルとキーボード、ジョーイ・プレイファスがセカンド・ギターさ。

6人編成？

そう、ビッグなロック・サウンドを出すために頭数が必要なんだよ（笑）。

そしてルークはヴァレイアーツのギターを弾きまくるってわけだ？

そう、そう。今度ヴァレイアーツからスティーヴ・ルカサー・モデルというのが出るんだけれど。

ウワサは聞いている……どんな仕様になるの？

僕の持っていたサンバースト・モデルとほとんどいっしょだよ。本当にこまかい部分は多少ちがうかも知れないけれどね。

材は何を使っているかわかる？

ボディはアッシュだと思う。ピックアップはカスタム・メイドされたEMG。それにフロイド・ローズがマウントされているんだよ。わりとシンプルなギターだと思うよ。メイン・コンセプトは弾きやすくて、良くサステインが利いて、チューニングが狂わない。これだけを満たせばあとはいらないよね、はっきり言って（笑）。

でもスティーヴ・ルカサー・モデルっていうことは基本的なデザインをルークが手がけたの？

そんな事ないんだ。いわゆるヴァレイアーツのモデル2の形をしたギターさ。まああれを作り出す時点で僕はずいぶんアドヴァイスしたからそう言っても別に問題はないんだけれどね。黒いピック・ガードにクリーム色のピック・アップが付いてくるよ。

ボディ・カラーは何色が発売されるの？

赤のサンバーストだけさ。

なるほど、もちろん自分でもそれと同じものを使うんでしょ

そう。日本にも持って行くよ。

あとアンプは何か変化あるの？

別に変化はないよ、レコーディングに使ったものをそのままライヴに持っていく予定さ。マイク・ソルダーノのアンプ、H＆Hのパワー・アンプ、ボブ・ブラッドショウのシステム・ボードといったところだね。

ソルダーノは何台持っているの？

今のところ3台かな。とても気に入っている。僕の持っているのは彼がアンプを作りはじめて4台目のヤツで、本当に良くなっているよ。

彼はそれまで何をやっていたの。どこかのメーカーにいたとかないの？

僕にも詳しい事はわからないんだけれど、とにかくいいヤツなんだマイクって……。

ルークが使い初めてからソルダーノはひとつのブームになっているからね（笑）。

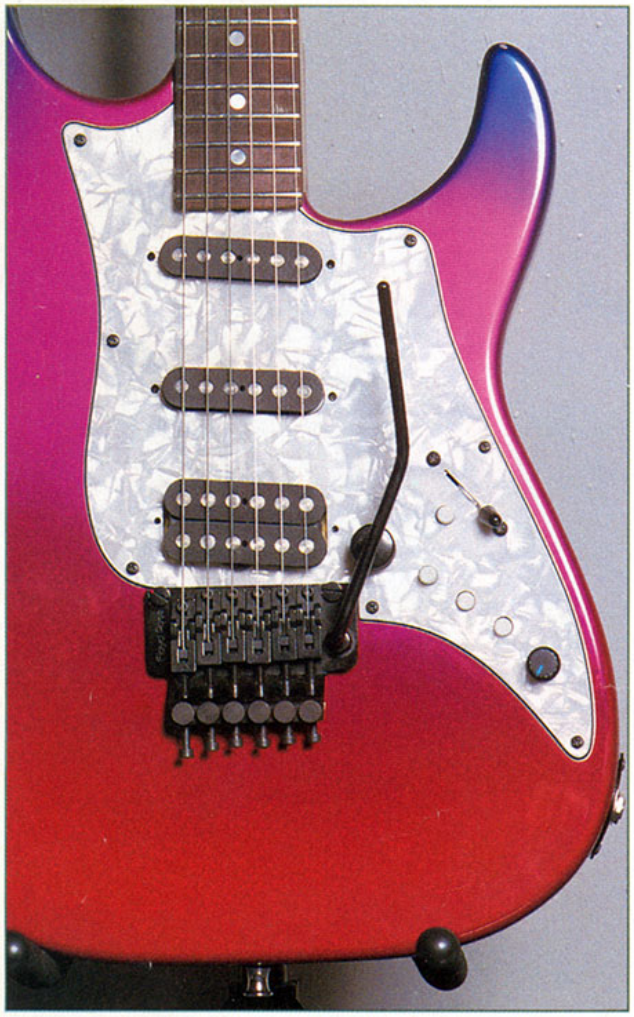
いいものは誰が使っても流行るんだよTakも一台買うといいよ。

本当にね。今日はどうもありがとう。東京で会うの楽しみにしてるよ。

僕もだよ！

おり、今後注目されるギターといえるだろう。

さて続いては、359P左のヴァレイアーツのチェリー・サンバースト。これも前出同様キルテッド・メイプルを使用した美しいギター。モデル2を基盤としている点では同じだが、P.U.がEMGではなく、トムアンダーソンをマウントしている。ミニ・スイッチはP.U.のON／OFFとコイル・タップの切り換えのもの。前出はジャック・プレートがフロントにあったが、これはサドにセットされている。'86年9月完成。

そして最後はナチュラル仕上げのヴァレイアーツ。これは昨年2月に製作したこの中では最も新しいギター。ボディはバール・セダーというとても軽量の材を使用。メイプル・ネック／エボニー指板をセットしたなかなか高級感のあるギターだ。ボディは薄いラッカーを40回も吹いて仕上げられ、味わい深いウッディなイメージを強調している。

この他にもルークはインタビューでも語っているように、ヴァレイアーツのルカサー・シグネチャー・モデルも使用している。このギターはショート・スケールで、ネック・グリップに特徴のあるギターだ。ネック裏のRが左右非対称となっており、ルカサー本人のアイディアを盛り込んだ仕様となっている。どのギターも単なるルックスだけでなく、プロ・ギタリストとしてのシビアな要求に応えてくれるギターばかりだ。